



第3までで導入期の訓練で、訓練生にとって安定して受講できる訓練環境を設定する取り組みについて説明してきました。

第4では「訓練生の困っていることや作業のやりにくさ」を軽減するための対応法の習得に向けた支援について説明します。

作業を通じた対応法の習得のための支援

- ① 行動観察について
- ② 行動に対する考察について
- ③ 支援の方法
- ④ 自己理解の可視化
- ⑤ 対応法の事例

作業を通じた対応法の習得に向けた支援では、訓練生は作業に取り組み、職員はその取り組みを観察して、訓練生の特性がどのように作業に影響するのかを把握し、訓練生が正確、円滑に作業を進めるための方法を考察します。その考察を基にして、訓練生と相談を繰り返し、対応法を習得できるまで支援していきます。

1 行動観察について

（1）行動観察の視点

職業訓練は就職を目指して実施されるものであり、導入期の訓練においても、①作業面の特徴のみならず、就職時に重視される②対人面の特徴や、③思考・行動の特徴等を様々な視点から把握するために行動観察をしていく必要があります。行動観察は、次のような3つの視点で行うとよいでしょう。

行動観察の3つの視点

①作業面の特徴

指示理解、作業耐性、集中力、持続力、安定性、作業の確認、質問、報告等

②対人面の特徴

挨拶・返事、言葉遣い、話の聞き取り、相手の気持ちや考えの理解、会話、友人関係等

③思考・行動の特徴

ストレス・疲労場面の状況、物事の捉え方、趣味・嗜好等

(2) 行動観察の注意点

訓練生の作業を観察して、「どのようなことができるのか」、「得意なことは何か」、「困っていることや作業のやりにくさは何か」を把握します。

図4-1のように「行動観察」は、その後の訓練生と職員による「考察」、「相談」を経て、「対応法の決定」に結びつけるためのものであることを意識する必要があります。

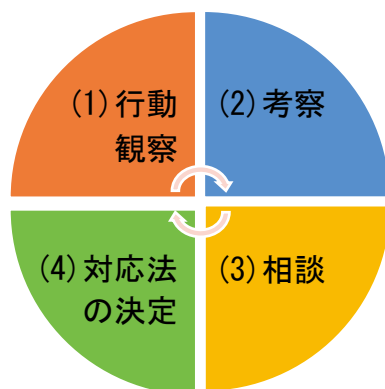


図4-1 行動観察から対応法を習得するまでの過程

2 行動に対する考察について

行動観察の中で、「困っていることや作業のやりにくさ」が見られたときには、その行動がなぜ起こり、「どのようにして作業のやりにくさを補い、スムーズに進められるか」を考察します。

考察にあたっては、行動観察の場面から訓練生の表面的な行動に対して着目するのではなく、その背景にある原因をしっかりと見極めるために4W1Hを意識することが有効です。

4W1Hの考察

When・Where	いつ・どの場面で
What	何がやりにくいのか
Why	なぜやりにくいのか
How	どうすれば楽にできるようになるのか

3 支援の方法

作業に対する個々の問題（例：本人のこだわりから一般的な作業手順に合わせられない時の困っていることや作業のやりにくさ）が見られた時、職員は改善に向けて対応していきます。この時、図4-2のように、①相談、②気づきの促し、③自己決定、④実践の順に実施することが望ましいと考えます。この方法は、訓練生が自己理解を深められ、自己理解 → 自己選択 → 自己決定ができるようになります。



図 4 - 2 支援の過程

(1) 相談 (なぜそうなったのか、職員が訓練生の認識を聞き出す)

訓練場面で、困っていることや作業のやりにくさ等が見られても、訓練生自身がその原因がわからないことがあります。

そのため、訓練生と職員が相談を通して作業状況を振り返り、原因を探ります。訓練生の考える原因と職員が考える原因が大きく異なる場合は、双方の考える原因について話し合い、お互いに理解したうえで、対応法を検討します。

(2) 気づきの促し

(訓練生が考える対応法を聞き出す・職員が考える対応法を提案)

対応法は職員が指導するのではなく、まず訓練生の考えている対応法を聞き出し、効果的・効率的なものであれば、実践を促しますが、状況に応じて職員の考える対応法も提案することで、異なる観点からの対応法を知ることができ訓練生の対応法の幅を広げられます。

(3) 自己決定 (訓練生が最善の対応法を選択する)

対応法が職員の提案と一致しない場合には、まずは訓練生の提案を実践してみても有効であればその対応法の習得を目指します。

訓練生の対応法が、困っていることや作業のやりにくさの解決につながらなかった場合は、職員が対応法を提案し、訓練生がこれに同意して実践する手順を踏むことで訓練生は納得感をもって取り組み、さらに、相談による問題解決の有効性を学ぶことができます。このように職員と一緒に検討して最善の対応法を選択していきます。

(4) 実践 (訓練生が対応法を実践する)

訓練生は、選択した対応法を実践し、職員は、行動観察を通して対応法が困っていることや作業のやりにくさの解決に至っているかを観察します。訓練生が最善と考えて実践した対応法が結果として解決につながらなかった場合には、再度相談に戻り、「なぜうまくいかなかったのか」を振り返り、気づきを促し、自己決定、実践の過程を繰り返しながら、訓練生と職員と一緒に検討して最善の対応法を導き出していきます。図 4 - 3 のように①相談～④実践の過程を繰り返し、適切な対応法の習得を目指します。

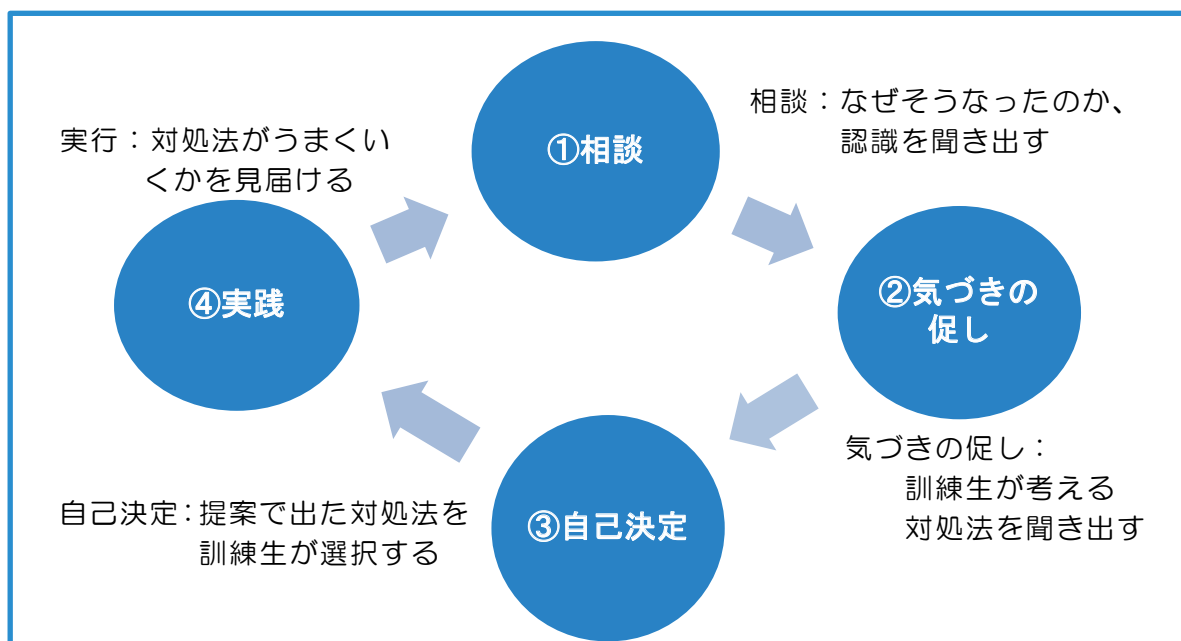


図 4 - 3 支援の循環

4 自己理解の可視化

第 2 で説明したとおり、自身を客観的に捉えることや情報の整理統合が苦手な訓練生もいます。導入期の訓練では自己理解を促すために、作業等を通して職員と情報を整理していくことが必要になります。

(1) 支援経過を振り返るためのツール

具体的に困っていることや作業のやりにくさを把握するためには、訓練生は職員との相談を重ねながら検討し、気付くことが多くあります。訓練生はこの気づきを踏まえて次にどのような対応をするのか決めていきますが、情報量が多くなると、どのような取り組みを経て現在の対応法に至ったのか忘れてしまうことがあります。そのため、訓練生は自身の行動や職員からの助言を記録しておくことが有効です。

支援の効果を高める工夫として、訓練生には白紙に「日付」、「やり取り」のみ記入してもらいます。記入時の注意点は、「訓練生と職員とのやり取り」と「訓練生の考え」以外は書かないことです。職員が、「自身の所感」等、訓練生が気付いていないことを補って記入すると、訓練生は見返した時に心当たりがない内容が記入されていることで混乱する恐れがあります。

相談を重ねる中で対応法が固まってくると、支援経過記録が蓄積されてきます。一定時期に当初のやり取りから現在までの過程を追って振り返ると、訓練生はこれまで取り組んだことの効果を実感して意欲の向上が期待できます。

支援経過記録の効果

- ・ 過去のやりとりを思い出せる
- ・ やり取りの直後に書くことで、理解を促すことができる
- ・ 訓練生が書くことで、意欲が高まりやすい
- ・ これまでの経緯を視覚情報として確認することができる

(2) 自己理解した内容を整理・まとめるツール

図4-4のように、訓練生自身が作業体験をもとに、自身の特徴や「セールスポイント（得意）」、「困っていることや作業のやりにくさ（苦手）」、「自分が努力していること」、「配慮をお願いしたいこと」等を取りまとめて、自らの特徴等を説明する際に活用するもので、導入期の訓練では、訓練や相談の中で気づいたことを記入します。

希望(予定)コース: _____ 氏名: _____

	セールスポイント (得意)	困っていることや作 業のやりにくさ (苦手)	対応方法	
			自分が努力していること	配慮をお願いしたいこと
入校時				
○日 目				
○日 目				
○日 目				

※作業面、対人面、思考、行動の特徴の観点から考えてみましょう。

図4-4 自己理解した内容を整理・まとめるツールの様式例

(1)、(2)で紹介したツールは共通して、「訓練生が主体的に作成する」、「一度作成したら完成ではなく改訂するものである」、「固定化された枠にとらわれるものではない」、ということに特徴があります。その特徴を踏まえたうえで、次の4つの留意点に注目しながら整理することが有効です。

作成時の留意点

- ・ 得意なこと
- ・ 作業上のやりにくいこと
- ・ 検討した対処方法
- ・ 配慮してもらいたい必要があること

※ 職員は、整理するための助言は行うが、自らが様式へ記入することは控える。

5 対応法の活用事例

本章「1 行動観察について」の「(1) 行動観察の視点」において、①作業面の特徴、②対人面の特徴、③思考・行動の特徴について説明しましたが、ここでは、それぞれの視点における気づきと対応法の例について紹介します。

①作業面の特徴

【気づき】過集中による疲労の蓄積

《対応法の例》タイマーを利用した一定時間での休憩の取得

【気づき】長い文書を見ていると他の行が気になる、行を見失う

《対応法の例》見ている行に定規を当てる、付箋で他の行をマスキング

【気づき】データ入力でミスが多い

《対応法の例》画面を指さし確認、データを無言で復唱、入力済みデータにレ印を付ける

【気づき】光・音に過敏で集中できない

《対応法の例》サングラス、耳栓の着用

【気づき】口頭での作業指示が覚えられない

《対応法の例》メモの活用

②対人面の特徴

【気づき】報告が苦手

《対応法の例》報告場面を再現して練習

【気づき】唐突に話しかけてしまう

《対応法の例》クッション言葉を利用、話しかけるタイミングを決める

【気づき】質問がなかなかできない

《対応法の例》当初は声掛けをする、段階的に報告する場面を設定する

③思考・行動の特徴

【気づき】自分の行動や課題を客観的に見られない

《対応法の例》対処方法を活用して成功体験を積み重ねることで認識を深める

【気づき】メモを取っているが活用できない

《対応法の例》目的別にメモをかき分ける、メモを参照することを促し習慣化する

【気づき】作業が上手くいかないと怒りをあらわにする

《対応法の例》場所を変えて興奮を治める、深呼吸、水分補給等に対処方法を相談する